

令和 2 年 6 月 20 日現在

機関番号：83811

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16768

研究課題名(和文) 近世中後期の日野・烏丸家の歌人における儀礼和歌を中心とした総合的研究

研究課題名(英文) The comprehensive study with a focus on "Girei Waka" by Hino poets and Karasumaru poets from the middle modern period to the late modern period

研究代表者

田代 一葉 (Tashiro, Kazuha)

ふじのくに地球環境史ミュージアム・学芸課・准教授

研究者番号：90567900

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、天皇を中心とする宮廷歌壇の活動が活発化し、中絶していた宮中儀式が次々と再興される江戸時代中後期の「儀礼和歌」を取り上げ、元文度大嘗会の際に約270年ぶりに制作された大嘗会屏風和歌と、寛政度内裏造営の際に新調された清涼殿障子和歌を考察対象とし、朝儀復興の風潮の中で日野家や烏丸家の歌人たちが果たした役割を明らかにした。

これらの研究を通じて、朝廷の儀式や内裏の空間にとっての儀礼和歌の意義の一端を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、元文度の大嘗会で再興された屏風歌について、詠進者の烏丸光栄の日記を手がかりに制作の過程を明らかにしたことと、寛政度の復古内裏造営の中で制作された清涼殿障子和歌に関する考証と内容を考察したことにある。

社会的意義としては、現代も行われている大嘗祭での屏風歌や京都御所の障子和歌が、平安時代以降、脈々と続いてきたものでなく、前者については、応仁の乱以降中絶していたものが、約270年近くの時を経て再興されたものであり、後者については、寛政度に新たに作り上げられたものであることなど、皇室文化の歴史の一端を具体的に示したことにある。

研究成果の概要(英文)： This study deals with "Girei Waka" from the middle Edo era to late Edo era. In this period, the poetic circles for the court that the emperor played a central part activated and the court ceremonies which have ceased before revived one after another. And this study examines Daijoue Byoubu Waka, which made at Genbundo daijoue after 270 years' absence and Seiryouden Shouji Waka newly made at reconstruction the imperial palace in Kansei period.

As a result, this study makes clear that the roles Hino poets and Karasumaru poets have played in revival of court council. These two Waka passes on the importance of existence of Girei Waka composing by the main people in the poetic circles for the imperial court ceremonies and the space of the court.

研究分野：日本近世文学

キーワード：儀礼和歌 元文度大嘗会和歌 寛政度清涼殿障子和歌 屏風歌 烏丸光栄 日野資矩 裏松固禅

## 1. 研究開始当初の背景

堂上歌人を対象とする近世和歌研究は、天皇や院を中心として形成されるサロンの活動や、公宴御会和歌の整理、中院家・冷泉家など累代の歌道家についての研究、また、堂上歌人が地下の人々に行った添削資料や聞書類からうかがえる具体的な指導や和歌観の解明など、多岐にわたっている。しかし、天皇や院の主催する公宴御会の研究を除くと、「儀礼和歌」という宮廷歌人の存在意義とも言える部分についての研究は、やや立ち後れていた。

私は本研究開始以前に、地下歌人を含めた近世期の和歌画賛について長期的に考察を行っており、公家の歌人についても烏丸光広や日野資枝の画賛活動について論文にまとめてきた。資枝の画賛の調査を進める過程で、平安末期の様式に則って紫宸殿・清涼殿が建造された寛政度内裏造営では、資枝の子・資矩が修理職奉行となり、日野家とも関わりの深い絵師・土佐光貞や、資枝の兄・裏松固禅、資枝の子・資矩が関与していることを知ることとなった。

また、調査を進めていくと、資枝の父・烏丸光栄は、文正元年(1466)の土御門天皇の時以降長く絶えていた大嘗会和歌の再興を、元文度の大嘗会(元文三年 1738)において成し遂げることに尽力した人物であることもわかった。大嘗会は、即位儀式の中で最も和歌と結びつきのある儀式であり、楽とともに唱われる風俗和歌と、節会の際の調度としてやまと絵屏風に色紙に書かれて貼られる屏風和歌とから成る。悠紀国・主基国をそれぞれ一名の歌人が詠む、きわめて祝祭性の強い歌で、宮中の重要な祭祀に関わるものである。元文度の主基方の詠者は、資枝の養父となる日野資時であり、以降、資枝・資矩も大嘗会和歌を詠進することとなる。

このことに関しては、室町期中絶される以前から、日野家が代々詠進を重ねてきた歴史があった。同時に、当代における歌詠みとしての実力や、歌壇における地位も重要であり、「今人麿」とも称された光栄の活躍により、注目される和歌の家へと歩を進めていったと考えられる。

以上をふまえ、晴の場や天皇の居所を彩る障子和歌や大嘗会などの、儀礼和歌を詠むことを許される歌人の条件としては、和歌故実やその家の過去の実績が重視されるが、日野・烏丸家の歌人の活躍が目立つことは注目すべきであり、このような視点を持ったものは先行する研究には見られなかった。

障子和歌や屏風歌は、画賛と同じ題画文学であり、それらに深い造詣のある日野家や烏丸家の歌人の動向から、近世中後期における儀礼和歌について考えてみたいと思いついたのが本研究の背景である。

## 2. 研究の目的

### (1) 元文度大嘗会屏風和歌について

長く中絶していた大嘗会の屏風とその和歌が、どのような過程を経て復興されたのについて、悠紀方の和歌を詠進した烏丸光栄周辺の資料から読み解くことで、宮中儀式の中でも特に重要な大嘗会の場において、和歌が果たす役割を考えることを目的とした。

### (2) 寛政度清涼殿障子和歌について

朝儀が執り行われる場であり、天皇の居所としての面も合わせ持つ清涼殿を彩った障子和歌について、その制作過程や実態、和歌と絵画の関係を考察することで、宮中の室内空間における和歌と絵画(大和絵)のもつ意味を考えることを目的とした。

これらの点を総合し、江戸時代中後期における日野・烏丸家歌人が儀礼和歌に果たした役割や、この時期の宮中における題画和歌の位置づけについて、知見を得ることを最終的な目標とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 元文度大嘗会屏風和歌について

当該研究の核になるのは、国内の各機関が所蔵する大嘗会関係の資料を調査し精読することによって、元文度大嘗会和歌を中心とした大嘗会和歌の実態や意義を解明することである。

訪問した主な調査機関は、宮内庁書陵部、国立公文書館内閣文庫、国立国会図書館、国文学研究資料館、東京国立博物館資料館、東京大学史料編纂所、京都府立京都学歴彩館などである。宮内庁書陵部蔵『光栄卿記』や、柳原隆光の『大嘗会和歌草案』(文政7年度)などは、特に精読が必要な資料は紙焼き資料を制作し、内容の抄録や年表の作成などを行い、考察を深めた。

## (2) 寛政度清涼殿障子和歌

寛政度の内裏造営に関する先行研究については多くの蓄積があるが、修理職奉行で清涼殿障子和歌の一切を取り仕切った日野資矩の活動に着目し、『日野資矩卿寛政二年日記』(京都大学文書館蔵)や『寛政新造内裏清涼殿大和絵障子歌』(宮内庁書陵部蔵)などの資料を読み解き、この度の障子和歌がどのように作られていったのか、障子絵とどのような繋がりをもっているのかを中心として考察を進めた。

また、東京大学史料編纂所蔵「裏松家史料」の裏松固禪の勅物類や、静嘉堂文庫蔵の『入道固禪注進勅物』を精読し、固禪の考証過程を検討したほか、活字化された資料である『京都御所造営録 造内裏御指図御用記』(詫間直樹氏編、中央公論美術出版)全五巻により、内裏造営の全体像の把握に努めた。

なお、本研究の全体に関わることであるが、計画段階では予想しなかった天皇の代替わりにより、2019年秋に執り行われた大嘗祭では皇居に大嘗宮が建設され、悠紀主基屏風が新調されることとなるなど、一般にも皇室とそれを取り巻く文化への関心が集まった時期に当たる。

これに関して、江戸時代の大嘗会屏風や紫宸殿の賢聖障子なども東京や京都の国立博物館に初めて展示され、実際に目にすることができ、原資料を通して、研究対象への理解を高めることができたことは、予期せぬ幸運だったと言える。

## 4. 研究成果

### (1) 元文度大嘗会屏風和歌について

当該研究の研究成果としては、元文度(1738)の大嘗会和歌復興に尽力した烏丸光栄の詠進日記や周辺の資料を読み解くことで、朝廷・幕府双方の思惑が複雑に絡んだ大嘗会および大嘗会和歌復興の様子的一端を明らかにした「近世期の儀礼和歌 元文三年度大嘗会和歌の再興について」(『日本文学研究ジャーナル』第4号、2017年)がある。光栄の日記『光栄卿記』からは、大嘗会の前年末にすでに和歌詠進の打診があったことがうかがえ、光栄が『兼仲日記』など歴代の古記録を精査・研究することで、大嘗会和歌を復活させることができたことについて述べ、その制作過程を示した。

また、「元文三年(1738) 大嘗会の再興と上方中心文化の終焉」(鈴木健一編『輪切りの江戸文化史 この一年に何が起こったか?』勉誠出版、2018年)においては、元文三年という年に焦点をあて概説する中で、朝廷と幕府の関係から大嘗会再興について考察した。元文度の大嘗会で再興された大嘗会和歌であるが、大嘗会に寄せる当時の將軍・徳川吉宗をはじめとした幕府側の思惑や、荷田在満によって著された『大嘗会便蒙』の出版とそれをめぐっての顛末について記した。元文三年の政治や社会の動き、文化や文学の様相など、この年に起こった世の中の動きと合わせて述べることで、江戸時代の儀式や儀礼和歌が社会の中でどのように位置づけられているのかを、一般の読者にも理解できるよう記述した。

### (2) 寛政度清涼殿障子和歌

当該研究の研究成果については、日本近世文学会秋季大会にて「寛政期の清涼殿障子和歌制作 日野資矩の役割を中心に」と題した学会発表を行った。そこでは、多分野にわたる先行研究をまとめ、寛政度内裏造営の概略を示し、寛政度清涼殿和歌の制作過程を『資矩卿記』(京都大学古文書室蔵)や『寛政新造内裏清涼殿大和絵障子歌』(宮内庁書陵部蔵)などの資料によりまとめ、修理職奉行を務めた日野資矩がどのようにこの障子歌制作を取り仕切ったのかについて述べた。

また、平安の古制に復古するという目的で行われた寛政度内裏造営であるが、その中で行われた清涼殿障子和歌は、実はこれまで存在した形跡がなく新たな試みであったことについて、裏松固禪の勅物類を検討することで明らかにし、この試みを成り立たせるための固禪の考証過程について考察した(『国語と国文学』第97巻第11号、2020年10月刊行に掲載予定)。

一般に向けた成果発表の取り組みとして、静岡県富士山世界遺産センターの館内講座(2020年1月)にて「和歌と屏風絵」と題して、大嘗会屏風歌や清涼殿障子和歌について解説を行い、私製のリーフレット「江戸時代の屏風歌・障子歌」の配布も行った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>田代一葉                         | 4. 巻<br>4           |
| 2. 論文標題<br>近世期の儀礼和歌 元文三年度大嘗会和歌の再興について  | 5. 発行年<br>2017年     |
| 3. 雑誌名<br>日本文学研究ジャーナル                  | 6. 最初と最後の頁<br>30-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>田代一葉                         | 4. 巻<br>97-11   |
| 2. 論文標題<br>寛政度清涼殿障子和歌と裏松固禪             | 5. 発行年<br>2020年 |
| 3. 雑誌名<br>国語と国文学                       | 6. 最初と最後の頁<br>- |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無      |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-       |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>田代一葉                      |
| 2. 発表標題<br>寛政期の清涼殿障子和歌制作 日野資矩の役割を中心に |
| 3. 学会等名<br>日本近世文学会                   |
| 4. 発表年<br>2019年                      |

〔図書〕 計1件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>鈴木健一（編者）、大山和哉、河村瑛子、西田正宏、深沢了子、田代一葉、杉田昌彦、高野奈未、田中康二、関原彩、有澤知世、門脇大、奥野美友紀、田中仁、磯部敦 | 4. 発行年<br>2018年 |
| 2. 出版社<br>勉誠出版  | 5. 総ページ数<br>384 |
| 3. 書名<br>輪切りの江戸文化史  |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|